

私と看護

「お父さん、お父さん。」何度呼んでも父が目覚ますことはなかった。私が中学二年生になったばかりの四月一日、父は自ら命を絶った。嘘だと思いたかった。父の姿を見るまでは信じられなかった。亡くなった父を見たとき、本当に悔しい気持ちでいっぱいだった。父は鬱病だった。きっと父は一人で、いろんなことを抱え込み悩んで生きる力を失くしてしまったのだと思った。私が気付いてあげられていたら何か変わっていたかもしれないと思うと、自分を責めずにはいらなかった。

中学二年生になった私は迷わず看護学校を受験することにした。父のように心が疲れ、生きる力を失いそうな人たちに寄り添い少しでも力になれる看護師になりたいと思った。受験には無事合格し看護師になるスタートラインに立った。看護の道に進んですぐ、私は傾聴という言葉を学んだ。私はあの頃、父の気持ちに話に耳を傾けられていなかったのだと気付いた。傾聴するのは大切だと、口で言うのはすごく簡単だ。だが、いざ施設実習や病院実習で患者様に関わらせていただくと、傾聴することはすごく難しいと感じた。非言語的コミュニケーションを活用し、患者様に寄り添い同じ景色を見て、同じ時間を過ごすことも傾聴につながると学んだ。私は思春期で父と会話がなかったことばかりを悔やんでいたが、父と過ごす時間が少なかったのだと思った。少しでも時間を作って同じ時間を過ごすことがどれだけ大切か、どれだけ気持ちが楽になるのか、看護学生になり実習を通して患者様と関わらせていただく機会がなければ気づくことができなかった。

看護学校に入って少し経ち学校に行けなくなった事があった。その時、私は父が亡くなる前に言っていた言葉を思い出した。「辛いなら学校に行かなくてもいい。」すごく気が楽になった。亡くなる前、父が整理してくれたアルバムを私が赤ちゃんの頃から見返した。私の隣には父が笑顔で寄り添っていた。私は一人じゃないのだと思い、また看護師になるために頑張ろうと勇気が湧いてきた。そのことが人は一人では生きていけないのだと気づききっかけになった。辛いとき、困難が立ちはだかったときに手を差し伸べてくれるような存在がなければ誰も生きる力を失う可能性があるのだと身をもって感じた。

私はお父さんの死がなければ看護師になろうと決心出来なかったと思う。お父さんの死からお父さんと私が共に過ごした時間を振り返ることがなければ人の気持ちに寄り添いたいと思ひ患者様の気持ちに寄り添おうとすることもなかったと思う。家族の死を経験しなければ患者様の家族の気持ちもわからなかったと思う。お父さんの死は私から大切なものを奪っただけではなく、看護師になるうえで、人として大切なことをたくさん教えてくれた。これからもお父さんに教わったことを胸に人の気持ちに寄り添える看護師になれるよう努力していきたい。お父さん、看護を教えてくれてありがとう。